

下村 脩先生がやって来た

櫻井 紘子 さくらい・ひろこ

脳科学総合研究センター(BSI) 細胞機能探索技術開発チーム
量子工学研究領域(RAP) 生命光学技術研究チーム
アシスタント

2008年ノーベル化学賞の受賞以前から、下村 脩先生は蛍光タンパク質(GFP)の分野で伝説の存在だった。伝説人はひそかに敬うべきと思ひ、宮脇敦史チームリーダー(TL)は下村先生に講演依頼するのを控えていたらしい。2008年以降、下村先生は時の人となった。その多忙さは容易に想像ができ、宮脇TLも私もなかなか招待に踏み切れなかった。もっとも、生物科学に関わる者であれば「GFPの父である下村先生にひと目会いたい」と思うのは至極当然である。

2013年春、長崎大学から宮脇TL宛てにシンポジウムの講演依頼が届いた。講演が決定しプログラムを確認すると、「下村 脩主催」とあるではないか。私の勝手な空想が始まった。「長崎のシンポジウムの前後に和光に来ていただいて、ラボミーティングでみんなと歓談していただいて……」。宮脇チームはGFPととても縁が深いのに、意外なことに、下村先生と面識があるラボメンバーは数名のみだ。宮脇TLに相談し、ファンレターのような招待状を送った。その翌日に返事を頂いた。「10月であれば可能性がありますよ。詳細は長崎で決めましょう」

9月28日長崎、ついに下村先生と明美夫人にお目にかかる。シンポジウムの懇親会で多くの方々に囲まれながら、打ち合わせの時間を割いていただいた。来所日は10月22日に決定。スケジュールは任せてくれるとのこ

と。実際には、実にさまざまな変更を経て、当日のスケジュールは二部構成となった。第一部、宮脇チームのラボミーティングに参加。第二部、理研セミナーでの講演。

第一部のラボミーティングでは、ラボメンバーのうちの8名がそれぞれ5分の持ち時間で研究発表を行った。下村先生からは素朴な質問と優しいコメントを頂いた。私たちにとっては掛け替えのない、あっという間の1時間であった。第二部の講演は、理研の研究者など約250名を前に、幼少期の思い出で始まった。1928年、京都に誕生。佐世保、満州、大阪と引っ越しが続いた。12歳のとき、長崎県諫早で原爆を体験する。そして終戦。戦後の混乱の中、何とか学べる場所を見つけ、与えられた研究に一つ一つ取り組み成果を出していった。アメリカで始めたオワンクラゲの研究では、サンプル採集のために、車で片道5000kmの距離を家族総出で毎夏往復したという。サンプルを収集し始めてから5年後、25万匹のクラゲから抽出したイクオリンの発光物質AF350の構造を解明した。詳細は分からずとも、オワンクラゲ研究のロマンに引き込まれた。本理研セミナーは、多くの方々の協力によって実現できた。さまざまな場面で助言を頂いた大河内 眞BSI副センター長、あらゆるサポートをいただいたBSI大野清美さん、下山田ちはるさん、広報室の方々に、この場を借りてお礼申し上げたい。

講演終盤に下村先生が発した科学者へのメッセージは、科学者ではない私の胸にも響いている。「皆さん、どんな分野でも興味のある問題に遭遇したときは、積極的にチャレンジしてください。何事もまずやり遂げる自信が大事です。自信はいろいろなことをやり遂げてこそ初めて得られるものです。自信があつてこそ、努力ができ、そして、成功が得られるのです」



写真1・ノーベル財団のポスターにサインをする下村 脩先生。明美夫人と。

写真2・ラボミーティング終了後の記念撮影。下村ご夫妻(前列中央)の間、後方が筆者。